

6. 慢性関節リウマチに合併した間質性肺炎に対し、免疫抑制、血液浄化療法を行った一例

(八王子・救命救急部, 腎臓内科*)

○篠崎真紀, 池田寿昭, 池田一美, 鈴木秀道,
鬼塚俊朗, 赫 寛雄, 鈴木克昌, 柿沼美和,
伊保谷憲子*, 吉田雅治*

今回、慢性関節リウマチ (RA) に間質性肺炎を合併し、急速な呼吸不全を呈し、集学的治療をおこなった症例において、各種メディエーター (IL-6, PAI-1, ICAM-1, TM, NOx) を経時的に測定し、若干の知見を得たので報告する。

【症例】 74歳、女性。54歳時にRAを発症し、軽度の肺線維症を併発していた。抗リウマチ薬、ミゾリピン、メトトレキサートに対する副作用のためステロイド療法とアクタリットのみが投与されていた。69歳時にIgA腎症によるステロイド抵抗性ネフローゼ症候群を発症し、慢性腎不全へ移行した。99年3月22日に感冒症状出現後、呼吸困難、意識レベルの低下が出現、急性間質性肺炎及び呼吸不全のため入院となった。入院後ステロイドパルス療法を行ったが、呼吸状態は改善せず、人工呼吸器管理下とし、ステロイドパルス療法、シクロスポリンによる免疫抑制療法と慢性腎不全及びhumoral mediatorの除去目的でCHDFを行ったところ、病状の進行を一時的に抑制したが、日和見感染からの多臓器不全と呼吸器による肺障害等により、全身状態が悪化し、第23病日に永眠した。

【考察】 RAに合併する間質性肺炎に対し、ステロイドパルス療法、免疫抑制療法、 γ グロブリン療法、血液浄化法を行った。各種メディエーター (IL-6, PAI-1, ICAM-1, TM, NOx) 測定の結果、組織学的には確認できなかったが、ステロイドと免疫抑制剤、血液浄化法にもかかわらず、RAの活動性及び血管内皮機能障害をおさえることができなかった。治療効果の指標として各種メディエーター測定が有効であると考えられた。

7. ヒト羊膜の角膜層間異種移植モデルにおける免疫学的検討

(眼科学)

○久保真人, 園田 靖, 村松隆次, 白井正彦

【目的】 重症瘢痕性角結膜疾患に対し羊膜移植時の有効性が報告されている。羊膜は胎児膜の一部であり、胎児を母体の免疫系から保護する作用があると考えられているが、羊膜の抗原性については不明な点が多い。今回ラット角膜層間移植モデルを作製し、ヒト羊膜の免疫学的特徴ならびに術後の免疫反応について検討した。

【対象と方法】 正常ヒト羊膜の組織抗原を検出するために、ヒトclass I抗原に対しては抗HLA-A, B, Cと抗 β 2ミクログロブリンのモノクローナル抗体を、またヒトclass II抗原に対しては抗HLA-Dのモノクローナル抗体を用い、ABC法にてそれぞれの発現の有無を観察した。角膜実質層間移植モデルでは、ヒト羊膜をLewisラットの角膜実質内へ移植し、細隙灯顕微鏡にて経時的に移植羊膜の透明性および新生血管の程度を観察した。さらにH.E.染色および抗ラットhelperT細胞, suppressor/CTLを用いたホストの免疫反応、ならびに抗ヒトclass I, class II抗体を用い羊膜の術後抗原性についても検討した。

【結果】 正常ヒト羊膜の上皮、実質においてclass I抗原の発現が著明であったが、class II抗原の発現は微弱であった。角膜層間モデルでは創部に達する軽微な血管侵入を認めたが、術後8週目でもほぼ全例で透明であり、ホストのリンパ球浸潤も軽度であった。

【考按】 異種移植であっても角膜層間内では羊膜は生着することが示された。

【結論】 ヒト羊膜の免疫原性は低く、Immune privileged materialと考えられる。